

教育における釣り文化の研究
— 海洋実習プログラムとしての釣りを考える —

小田 慶喜¹⁾
園田 浩一¹⁾
三浦 敏弘²⁾

A study of the fishing culture in the outdoor education
—Fishing education as the marine training program—

Yoshinobu ODA¹⁾
Koichi SONODA¹⁾
Toshihiro MIURA²⁾

Abstract

The research of outdoor sports culture in the universities is important to understand environmental education. We have developed into fishing education program in outdoor education at marine camp program. The programs of fishing education or angling education are not popular in Japanese universities. But with today's fast pace and increasing life pressures, many of our students want to search out these streams as sources of relaxation and recreation. This outdoor program uses fish and fishing as a means to teach environmental areas to university students. In general, the program of fishing education must be educational in nature, and instruct participants on physical activities, environmental education, regulations, ethics, fishing techniques, and water safety. Fishing programs are able to learn about the fish that live in different parts of the sea. Students learn the traditional culture of the physical arts through fishing programs

1) 姫路獨協大学
〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
Himeji Dokkyo University
7-2-1 Kamiono, Himeji- City, Hyogo 670-8524

2) 関西大学
〒564-0073 大阪府吹田市山手町
Kansai University
Yamate-cho, Suita-City, Osaka 564-0073

I. 緒言

野外教育文化として捉えることのできる「釣り」という生活文化には、いろいろな解釈が存在し、様々な取り組みが考えられる。特に体育学を背景とした野外教育領域において、学校教育における授業として取り組む「釣り」に関しては、環境学や生態学、あるいは技術論や伝統文化など関わる要因が多く存在するため、その統一性を論議することを難しくしている。

また、野外教育における実習を伴う授業としても、「釣り」の持つ魅力は期待されており、技術論に固執するのではない、自然観察の要素を多く含む授業の展開として、著者らは取り組む努力をしている。しかし、文部科学省が掲げる教員免許取得のための必修として課されている体育実技は、自然観察や伝統文化体験等の要素を含む体育実技を認めない傾向にある。総合的教育領域として評価されている体育実技の領域が、より狭義に修正される指導に体育関係者として不安を感じるところでもある。

このような社会的背景を考慮して「釣り」を取り上げるならば、『古事記』に出てくる海幸彦（火照命ホデリノミコト）と山幸彦（火遠理命ホオリノミコト）の神話は、神話としての評価よりも史実としての生活文化を表している内容に注目する価値がある。この時代にすでに鉤（釣り針）を用いる漁獵法、すなわち「釣り」が存在していたことに人間の叡智を感じることができる。考古学的にも、青森県三内丸山遺跡（縄文時代）や鳥取県青谷上寺地遺跡（弥生時代）から骨角器の錐や釣り針が出土しており、道具の文化としても取り上げることのできる教材が、「釣り」には多数存在している。

また、井伏鱒二の「釣師・釣場」¹⁾や「釣人」²⁾、アイザック・ウォルトンの「釣魚大全」³⁾、徳富蘆花の「自然と人生」⁴⁾などは、文学における「釣り」に関わる文化として取り上げても存在感がある。特に井伏鱒二の「川釣り」⁵⁾は、日常生活の中で「釣り」という生活行為を書き記すこ

との重要性、すなわち野外教育文化に触れる生活の重要性を示している。このことは、スポーツ競技を中心として指導される現代の体育教育が失い忘れ去ろうとしている本質を、示しているとも考えられる。

「釣り」を授業のテーマとして取り上げる場合の具体例としては、東京水産大学が公開講座として開講した「釣りから学ぶ ―自然と人間の関係―」⁶⁾のように、食糧確保のための「釣り」と人間の精神面を支える「釣り」の両面を、水産という立場から総合的解釈を試みた取り組みが報告されている。この講座において取り上げられた「釣り」は、自然環境に人間がどのように支えられているのかを考える問題提起として、大きな役割を果たしている。

スポーツ領域における「釣り」の展開を考える場合、多くの体育関係者は、よりスポーツ的な要素を強調して、釣果を上げる技術やポイントへの正確なコントロールを教えることを中心とした、「釣り」の技術の点数化、すなわち釣果によって評価される部分を強調する傾向が高い。教育や身体文化を重視する体育として考える「釣り」においては、「釣り」の技術を教えることに主眼を置く必要はなく、自然環境における「釣り」文化の存在価値を中心に取り組む必要があると考えている。体育の教員が「釣り」を通じて教えなければならない部分は、自然の中における人間としての存在をいかに理解し、恵まれた自然環境の中での身体運動の在り方を考えることである。

II. 大学における「釣り」教育の取り組み

前述したように、「釣り」を授業のテーマとして取り上げる具体例としては、東京水産大学が公開講座として開講した「釣りから学ぶ ―自然と人間の関係―」⁶⁾のように、食糧確保のための「釣り」と人間の精神面を支える「釣り」の両面を水産という立場から総合的解釈を試みた取り組みの

発展性が評価される。しかし、公開講座として開講し、社会の多くの人を対象とした講座としては開講が可能であるが、学生を対象とした授業形式のものとしては、その展開が難しい。特に「釣り」を専門とする研究者は少なく、多方面の視点から「釣り」をテーマとして講義を展開することは、多くの困難を要する可能性が高い。

このような状況下において、1998年から2000年にかけて2年間東京大学教養学部の授業として「へら鮒釣り－日本独自のスポーツ・フィッシング」というゼミナール形式の授業が開講されている。⁷⁾ 実際に授業を実施し成果を上げた身体運動科学教室の金久、篠原両氏の開講への努力は、非常に困難を要したことが推測できる。担当者の都合等により、2年間でこの取り組みは終了しているが、全学自由研究ゼミナールという、東京大学教養学部独特の教養に対する理解があってこそ成立できる授業ではないかと理解できる。さらに身体運動科学教室の環境問題等も含めた身体運動科学教育の展開を、どのように実践していくべきかの問いかけに対し、本来の教養教育の実践を展開できた画期的な取り組みであったと評価することができる。宮下⁸⁾は、自然環境および生活環境に対する人間の態度について、釣り人のマナーの悪さに対する批判が、成長段階のどこかで「釣り」についての教育がなされていない状況を指摘している。換言すれば、「釣り」という文化を示して、人間の生活文化の在り方を問うているのである。その中で、余暇の問題や環境問題について「生物」、「道徳」、「体育」などの領域から取り組むべき問題なのか判然としないことを述べているが、まさしく分断された教科教育の欠落部分に対する指摘であり、現代社会の抱える人口増加や自然保護と深く関わる諸問題に対する教育の欠如を指摘している重要な部分でもある。領域を超えた教育の展開は今後重要な教養教育として注目され、具体的な展開が期待される場所であり、その展開の中心となるべき大学における教養教育は、その実施内容が注目される可能性が高い。「釣り」は単なる教養の授業ではなく、実践を伴う教養教育としての一翼を担う可能性が高いと考えられる。

Ⅲ. 身体運動文化としての「釣り」

体育教育の領域で最も重視される部分は、身体で感じることのできる多くのことを理解するということである。多くの場合、体験型学習や実践といった表現でその展開を試みるが、経験を通じて知ることの重要性が、身体運動文化の求めるところであることは、周知されているところでもある。

開高⁹⁾は、中国の古諺として、「一時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい。三日間、幸せになりたかったら結婚しなさい。八日間、幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい。永遠に幸せになりたかったら釣りを覚えなさい」を、著書『オーパ!』の中で紹介した。この種の古諺は数多く存在し、出典が明らかでないものも多く、開高の創作とも考えられるが、多くの釣り関係者の共感を得ていることも事実である。

井伏鱒二や徳富蘆花、あるいは開高健や宮下充正のように文学的および科学的な視点で「釣り」を捉える才能に恵まれていなくても、「釣り」は人間の社会に文化として定着しており、積極的に自然環境を理解し、人間の生活文化がどのように存在しているのかを理解する具体的な取り組みとして評価できる。

市野¹⁰⁾は、北海道の製紙会社の付属病院にかかる患者の生活背景を調査し、赴任地に適応できない家族が、ストレス起因の症状を呈している患者に対し、海産物の加工を積極的に取り入れ病状を軽減させた医師の対応策を「スルメ・シシャモ予防医学」と紹介している。身体運動文化の基本には、肉体と心のバランスを調整し、人間本来の生き方を考える要素が含まれているが、地域依存の産物を住民が理解し共有する文化の重要性を指摘している。「釣り」文化の継承には、このように地域における人間の生き方等も考える機会を提供する要素も含まれている。

IV. 「釣り」体験が齎すもの

古事記に出てくる海幸彦（火照命ホデリノミコト）と山幸彦（火遠理命ホオリノミコト）の日本神話は、現代社会において語られることが少なくなってきたことは、時代の変化を表している。子どもたちが魚に触れる生活習慣も少なくなり、魚を通じて多くのことを学ぶ生活も現代社会から欠落しつつある。反面、スポーツ・フィッシングと称して、特定の魚だけを対象としてゲーム化した「釣り」文化が浸透しつつあるが、実際には魚の成育する環境を通じて、より広範囲な社会を見つめる感覚を学ぶことが重要である。

レオ・レオニ¹³⁾は、絵本『スイミー』を通して魚の存在を子どもの生活に取り入れる機会を創り出した。日本の教科書にも採用されたように、内容は差別や人権問題あるいは創意工夫等多くのことを含んでいるが、絵本としての最大の功績は、子どもたちに魚を意識させた点にあると考えられる。

子どもに提供する多くの体験と想像を促す取り組みは、教育の重要な課題でもある。生活文化としての漁業の理解も重要な教育課題であるが、遊戯の延長として魚に関わる文化を考えることも重要な課題でもある。この方向性を見失えば、社会問題となっている「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により規制されている問題点を認識できなくなる可能性が高い。すなわち、日本在来生物の捕食、生態系への悪影響、人の生命・身体や農林水産業への被害、あるいはその可能性の高い外来生物による環境被害を加速する傾向が高くなる。多くの外来生物は、人間が人為的に持ち込んだものであり、環境への影響を認識できない人間の行動を考えていく努力が必要である。

魚を知ることは、子どもの体験として楽しい感覚を認識する場の提供でもある。子どもの頃を思い出せば理解できるが、小川や小さな湾処、タイドプールに魚がいると中に入って何とか捕獲しようとする。この現象は、

大学における野外教育の実習においても多く観察されている。しかし、素手で魚の捕獲は難しく、どのように捕獲するかを考える機会を提供する。観光地やイベントで提供される鮎や岩魚の掴み取りは、子どもたちの手におえる代物ではなく、幸運にも捕獲した魚は、逃避行動で疲労困憊し酸欠状態で弱り切った魚であることが多いのも事実である。素手での捕獲が難しいと考えると、子どもたちは網を利用することを考え始め、場所が深ければ、釣り上げようとする。篠竹を切って釣り糸を付け、釣り針に飯粒やミミズをつけて何とか魚を釣ろうと創意工夫を重ねる。かつて子どもたちは、このような生活体験から「釣り」を覚え、より高度な技術獲得に変化してきた経緯がある。さらに、存在するものを全て捕り尽くすという行為ではなく、何度も繰り返し魚との頭脳戦を楽しむ環境の保持を考えることに努力をする行動を学ぶ機会を与えられる。多くの人々が体験している故郷の河川や湖沼が魚の生息できない状況に変化している原因は、子どもたちによる乱獲が原因ではなく、人間中心の都市計画や効率追求型の化学薬品に依存する農林水産業の展開の影響が大きいのである。

V. 「釣り」をどのように教えるか

筆者らは、平成16年度全国大学体育指導者夏期中央研修会として、大学における体育担当教員を対象として、野外教育研究の一環として「フィッシング」の講座を担当した。本講座において、以下のような資料を準備し、参加者へ提供した。

『平成16年度・全国大学体育指導者夏期中央研修会「フィッシング」提供資料』

アウトドアスポーツとして、フィッシング(釣り)を捉えたとき、スポー

ツ・フィッシング、ゲームフィッシングという言葉が浮かびます。本来、生きる糧を得るための行為でしたが、その中でも、数や大きさを競うということは行われており、プロのトーナメントのあるバスフィッシングや、厳密なルールの上で実際に魚を釣らず正確度や距離を競うスポーツキャスティングなどもあります。

実際に魚を釣らないものは別として、どのような釣りも対称となるフィールドの自然や、対象魚を理解しなければなりません。天候、水温、潮汐を見極めたうえで、どのような釣り方を行うか、竿の長さは、硬さは、ライン（道糸・ハリス）の太さは、錘の重さは、針の形、大きさなどなどさまざまなことを考える必要があります。初心者が釣りをする場合には、釣れるかどうか釣りに対する印象を大きく左右します。その意味では、制約は多いですが、フィールド、季節、指導者を十分に考えておく必要があります。

今回は、姫路獨協大学が、アウトドアスポーツとして、ヨット、カヌー、カヤック、ダイビング、フィッシング等の実習を行ってきたYMCA阿南国際海洋センターでのフィッシングを中心に講習の実施要領、考え方等について解説します。

(1) フィールドについて

YMCA阿南国際海洋センターは、四国最東端から少し、瀬戸内海に入ったところにあります。基本的には、大きな岩が散在する磯場ですが、栈橋周辺には、砂地の場所があり、野の島、ウルメ島周辺には、少し大きめの石が転がっています（ゴロタ場）が、投げ釣りの出来るフィールドがあります。

釣れる魚は、カサゴ、アイナメ、カワハギ、キュウセン、イソベラ、キス、アジ、スズメダイ、クサフグ（毒魚）などが主で、多く泳いでいますが釣ることが難しいないのが黒鯛です。また、夜釣りでゴンズイ（毒魚）がつかれることもあります。

釣り方としては、根魚と呼ばれる岩の間に潜んでいる魚や、低層を泳いでいる魚が対象となります。

姫路獨協大学の実習は、毎年9月の初めに実施してきました。一番多くの魚種がつかれる時期ですので、まったく釣ることのできない学生はほとんどいません。

(2) 目標

姫路獨協大学では、3泊4日で行っています。半日単位で行動計画を立て、天候や、フィールドの状態を見ながらプログラムを進めています。目標としては、以下のものが段階的に達成されればよいと考えています。

A. 魚を釣ること

まずは、どのような方法であってもよいので魚を釣ることです。初心者に必要なのは、まず釣ったときの喜びを感じることです。それが、継続的な釣りに繋がっていき、工夫する努力に繋がります。この経験が、そのフィールドに対する思いや、自然に対する理解に繋がっていくものと考えています。

最初に、基本的な釣り方について説明します。餌の付け方、基本的な竿さばき、棚の取り方、どの棚を狙うかが直接釣果に影響します。

仕掛けに関しては、市販仕掛けを結ぶものでよいと思います。多数の学生が同じ仕掛けで釣っても、釣れる学生、釣れない学生が出てきます。基本的な釣り方に忠実に行えば、ある程度の釣果は得られるはずですが、釣り座を構えた場所の状態が一定ではありませんので、いろんな場所を釣らせる必要があります。さらに、釣れた場所を交代して釣らせるようにするなどの配慮が必要です。

最初の釣り場は、安全面を考えて、できるだけ広い足場のしっかりした防波堤や、栈橋、漁港で行います。そこで、十分に竿さばき等を練習しま

す。

B. 仕掛けを正しく作ること

仕掛けには、先人の知恵がたくさん盛り込まれています。正しい結びができないと、魚をかけてもほどけて悔しい思いをします。針結び、糸結びなどにはさまざまな結び方があり、糸が切れたりした時に、また、釣っている最中に状況に応じて、仕掛けを作り直したり、交換したりする必要がありますが、素早くできる必要があります。

釣果を上げたいと思うと、仕掛けを工夫するようになります。まずは、針の大きさ、糸の太さ（ハリス：針を結んでいる糸）、長さを変更することから始めます。釣れる魚の大きさに応じて、針の大きさは変更します。糸が切られるときには太くする必要があります。なかなか針掛りしないときには、糸を短くします。当たりが出ない場合には、ハリスを細く、長くすると釣れる場合もあります。

C. フィールドを理解すること

どこで釣れるかは、海底の様子を理解しなければなりません。投げ釣りでは、投げた仕掛けを手繰ってくる時に海底の様子を竿から感じ取ります。カケアガリと言われる浅瀬から急に深くなる場所あたりにたくさんの魚がいます。磯釣りでは「根」と呼ばれる海底に突き出している岩などの周りには魚がいます。海底の多少変化があるだけでも魚がいる場合があります。カケアガリ、根などは、水面から見ていると海面の色が違いますので、おおよそ見当がつきます。

海洋センターでの実習では、本来の釣りからすると邪道と言われるかもしれませんが、実際に海に入って魚がどの辺りにいるか、実際に餌を与えてみてどのような食餌行動をとるのかを観察することも体験させます。このような取り組みにより、一般の釣りが長い経験から得ていたことを、比較的短期間で理解させることができます。

D. 道具を大切に扱うこと、自己と他者の安全に注意すること

トラブルを回避するためには、常に周りに注意し、丁寧に道具を扱う必要があります。自分が所有する道具であれば丁寧に扱うでしょうが、最初に正しい、丁寧な扱い方を指導すれば定着しやすくなると考えています。

慣れてくると、磯場では危険な場所に出て行く可能性が生じますので、改めて安全面に注意する必要があります。磯場ではどこにいるのか確認しづらい場合がありますので、場合によってはダイビングのようにバディを組ませたり、岩に触れたり、岩場の移動、特に濡れた岩に注意させることが必要です。

投げ釣りでは、経験を積むことにより、学生はより遠くへ投げる欲求を持ち始めます。投げる方向、そして回りに注意することは、たびたび指導する必要があります。

今回の講座では、他人の中に入って釣りをするということはほとんどありませんが、通常は、他の釣り人とのコミュニケーションをとることやマナーについて十分に理解させることが必要です。

E. 創意工夫をすること

仕掛けを工夫することも重要ですが、それよりも前に釣り場所を変更するために魚のいる場所を推察して釣ることを考えさせます。場合によっては、海に入って魚の食餌行動を観察することも積極的に取り入れています。

アウトドアスポーツとして実習をおこなっていますので、フィッシングを継続的に行わせることよりも、フィッシングを通して、自分の行動から自身を見つめ、自然を感じ、自然に目を向けさせることに重点を置いて実習を構成しています。

F. 海洋実習におけるスケジュール理解

姫路獨協大学では、半日を1つの単位として行動していますが、3泊4日で実習を行っています。スケジュールとしては、以下のとおりです。

1. 延べ竿の仕掛けの作成、棧橋からの釣り
2. 投げ釣りの投げ方の練習、棧橋もしくは竹田浜からの投げ釣り
3. 一日を通して野の島での釣り (野外炊事)

脈釣り、投げ釣り、海中に入っのの見釣りなどを自由に行かせます。食べることのできる魚は、昼食時に煮魚として調理して食べることも体験します。

4. カッター、カヌーを出して船上からの釣り

あらかじめ置いたカッターから、カヌーで好きなところに移動して釣ります。この場合には、少し深い場所を釣ることになりますが、短い竿がありませんので、投げ竿仕掛けを利用して釣ります。用意できれば、短い磯竿・いかだ竿がある方が釣りやすいことも経験します。慣れてくれば一般の船釣りと同じように手釣りもあたりを直接捉えることが出来るので体験することも出来ます。

天候、釣果に応じて場所を移動します。実習地周辺の無人島に上陸して、釣ることも体験します。地図を見て島までの距離を確認し、カヌーを使って学生自身で移動することも体験しています。

G. 道具の扱い方を理解すること

道具の扱い方には、十分注意する必要があります。一般的な道具の扱いは元より、多人数で釣る場合には特に他人の道具にも注意させる必要があります。

1. 竿

一般に振り出し竿を使用しますので、伸ばす場合には、穂先から順に伸ばします。継ぎ手はしっかりとかみ合うようにしますが、強すぎると縮められなくなりますので注意が必要です。縮めるときは、逆に元から順に縮めていきます。

もし、途中で緩んで縮んでしまった場合には、そのまま縮めずいったん伸ばしてから元から縮めます。そうしないと下の竿が先の竿をちょうどな

たで割るように割ってしまうことがあります。

竿は一番下を持って釣ります。一番下を持っていればラインが引っ張られて竿が曲がっても簡単には折れません。途中を持ったり、途中を曲げたりすると簡単に折れますので注意が必要です。

海底に釣り針が引っ掛かった場合、すなわち根掛かりをした場合には、ラインを引っ張ります。ラインを引っ張るときには、タオル等を持って手に巻きつけてラインが滑らないようにして引っ張ります。ラインがすべると手を切ってしまいますので安易には、引っ張らないようにして下さい。

竿は、地面においてははいけません。継ぎ目に砂が入ると竿を傷めます。また、不用意に竿をまたいではいけません。間違っ踏んでしまうと竿は簡単に折れてしまいます。

竿を伸ばしたまま移動する場合には、竿先に十分注意してください。ラインが木に絡んで切れてしまったり、竿先が折れたりします。また、電線に触れると感電する可能性もあります。

2. リール

リールは使用しないときには、ドラグを緩め、使用する前にドラグを適切な強さに調節します。

リールは、海水に浸けてはいけません。浸かってしまったときには、できるだけすみやかに上げて、水洗いします。

使用後は、必ず水洗いします。その際は、流水で流すようにして、内部に水の入らないようにします。

3. ライン

使用したラインは、徐々に劣化します。数回の使用でラインは交換します。岩にすれたりしたラインは、傷がついているか確認して、傷が付いたら交換もしくは、その部分を捨てて繋ぎます。

H. 釣り方を理解すること

魚を釣るための基本的な釣り方として、延べ竿による脈釣りと、投げ釣

りを基本として行っています。

1. 脈釣り

延べ竿を利用した基本的な釣り方（仕掛け図は最後に付けます）で、竿を上下することで釣る棚（深さ）を調節しながら釣ります。魚がかかったときには、直接手でアタリ（魚が針にかかった感触）を取ります。主に、根魚（海底の石の間などにいる魚）を釣りますので仕掛けを底まで下ろして、少しだけ餌が底を切る（底から離れる）様に心がけます。錘が底に着いたかどうかは、竿先のたわみ具合で判断します。

アタリがあった場合にはアワセ（針がしっかりかかるように竿をすばやく少し上げる）を入れて釣り上げます。この一連の動作がスムーズに行うことが出来ないと、餌だけ取られる、棚が合わずに釣れないということになります。

基本的に魚は自分より上にあるものを見ています。棚が低すぎると見えません。また、高すぎると見えてはいてもそこまで上がってきません。ただし、活性が高くなる（餌がたくさんあると警戒心が薄れて餌を食べることに集中する）と釣る棚が上がってきます。

2. 投げ釣り

一般的な投げ釣りのスタイルで行いますが、初心者ですので、やわらかい竿で軽い錘を使用します。たいていの初心者の場合、投げたときにラインを離すタイミングが早いために思った方向には飛びません。場合によっては、90度近くずれて危ない場合があります。そのため、必ず練習が必要です。本来は、竿にあった錘を付けて練習するのがよいのですが、多人数で練習する場合に場所の制約を受けますので、イメージをつかませるために錘の変わりにスーパーボールを付けて練習させています。重さが軽いので、本来の「竿のたわみを利用して投げる」ということの練習には、なりにくいのですが、練習をしておくとお実際に錘を付けて投げても前方に飛ぶようになります。

釣竿のたわみを利用して投げるようになると先端から2、3つ目のガイ

ドが回ってしまったり、ガイドがずれたりするので、投げた後には、チェックします。

投げるときには、まず、前方に注意し、誰かのラインをまたがないようにします。そして、後ろ、横に人がいないか確認します。そして、リールのペールを起こしているか確認して投げます。だれかが、前方に投げている場合には別の方向に投げたほうがよいですが、すでに投げられているものよりも遠投し、ラインを張る状態にしておけばおまつり（ラインが絡む）になることはほぼ回避できます。

I. おわりに

現代社会において、自然環境が大きく変わり、社会環境の変化も加わって、釣りが大きく変化してきています。ルアーフィッシングなどは、日本では比較的新しい釣りです。技術書などを参考にして釣りをする人が増えていますが、自然環境への配慮や釣りのマナー等については理解が促されておらず、問題も多いようです。

スポーツ・フィッシングとしてバスフィッシング等を行うことも考えられますが、社会問題化している生態系の破壊などについても触れる必要があると思われます。一方、伝承されてきた文化としての釣りを学ぶといった態度も必用であると考えています。

魚を釣ることは楽しい体験学習につながります。子どもから高齢者まで「釣り」を楽しむことが可能です。「釣り」を経験することにより、自然に触れる機会が増え、人間と自然の関係を積極的に理解することを期待します。

以上が、全国大学体育指導者夏期中央研修会として、大学における体育担当教員を対象として、野外教育研究の一環として「フィッシング」の講座を担当した際の提供資料の抜粋である。

「釣り」をテーマとしての研修会であるので、魚を釣り上げることを重視

した内容を紹介しているが、本来は魚を含む海洋生物や生息環境を認識する取り組みとして「釣り」の授業を展開していることに重きを置いている。

VI. 大学の授業として学生に「釣り」をどのように教えるか

前述したとおり、姫路獨協大学では、野外教育の一環として海洋実習において「釣り（フィッシング）」の授業を展開している。

以下に簡単にその実施状況を述べる。

(1) コース概説として自然環境を理解することに重点を置く取り組み
「釣り（フィッシング）」コースでは、自然に対する疑問や理解をうながす方法として、人類が積極的に取り組んできた「釣り」の技術を中心として取り組んでいきたいと思えます。海の釣りは、その対象とする魚種や大きさ、場所、季節、天候、海況などによって多種多様な、多くの釣り方が存在します。自然環境を理解し、科学的に物事に取り組んでいくことのできる基礎が、私たちの生活や遊びの中に存在しています。自然に対して謙虚に向き合い、受け入れ、働きかけ、理解し合うことのできる人間として成長する努力をしてみましょう。

海辺の生活で、大きな楽しみの一つに「釣り」があります。海洋での自然活動実習地のYMCA阿南海洋センターは、幸い岩礁や砂浜に恵まれ、魚の種類も多く、釣りには絶好の場所であり、いろいろな釣りを楽しむことができます。

この実習では、海釣りの最も基本的で比較的簡単な「脈釣り」「投げ釣り」「ウキ釣り」など釣り具の作り方から、初歩的な釣り方を習得するように構成されています。最近注目されてきた、疑似餌を使つての釣りも考えてみましょう。釣りの対象魚は、ベラ、カサゴ、メバル、キス、コチ、アジ、タイなどであり、釣り上げた魚は、努力してその調理方法も考えて

みましょう。

「釣り」のルールを認識して守り、自然や魚との対話を楽しみながら、「釣り」文化を楽しむように心がけてください。

人間は、自然界の一員として、自然の一部として生きています。自然の存在によって生かされていると考えた方が良いのかも知れません。海洋生物である魚類を観察することを中心にして、海洋に関わる自然を体験してみましょう。海の中には多数の生物が棲息しています。それらは相互に関連し合つて生態系の構造を保ちながら生きています。釣りを体験しながら、海洋生物に興味を持ち、地球の自然環境を考える生き方を実践してみましょう。

(2) 事前準備および注意事項を徹底し、各自が意識を持って参加することを促す取り組み

- ・日頃、使い慣れた釣り具があれば持参する。
- ・日焼け防止のために、水着、帽子、長袖シャツ、長ズボン、運動靴（濡れてもよいもの）、軍手、サングラス、水筒、日焼け止めクリーム、雨具（上下別のもの）、ライター、懐中電灯、ナイフ類等を用意する。
- ・釣り糸と釣り針の結び方を練習しておく。
- ・魚類図鑑等で、コース解説中にあげた魚を調べておく。
- ・魚屋やスーパーの鮮魚販売所で売られている魚の種類や値段を観察しておく。

図1にキュウセンの販売状況を示した。魚類の販売は、地域名や総称で扱われる場合も多く、地域性が現れる。また、時間を経ることによる販売価格の変化も重要な経済的指標の観察につながる。実習の事前授業においては、販売されている魚の種類・名称、販売価格、調理方法等について、学生の観察を促している。



図1. キュウセン (ベラ) の販売価格

(3) 釣り道具の技術を理解する

釣り道具の扱いを理解することは、重要な部分である。どのような工夫がなされ、どのように変化してきたかを積極的に理解することにより、「釣り」に関わる多くの事象を理解することが出来る重要な点でもある。高度な技術論も重要であるが、基礎的な道具の扱いを理解することが、安全に正しく「釣り」を実践することにつながると思っている。

経験上、学生が最初に苦労をする部分は、針結びである。一般的には、市販のものを用いてこの部分を割愛することが多いが、釣り針と釣り糸をどのように結び付けるかは、「釣り」文化として理解しておく必要がある。

実際の釣り針は小さく、釣り糸も細く、これを学生が扱うには細心の注意が必要である。実際には図2に示すように、大きな釣り針の代用品とロープを釣り糸と想定して、針結びを理解させるようにしている。

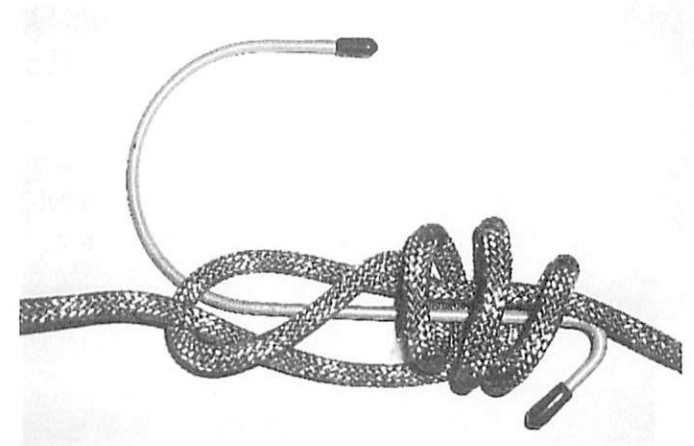
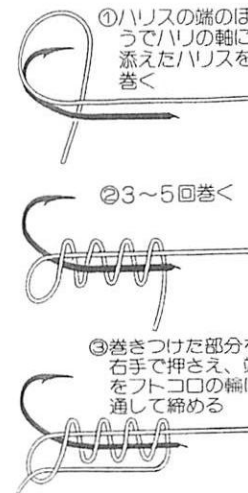


図2. 針結び (外掛け本結び) の理解

(3) 魚を観察する

海面下すなわち水中がどのようなになっているかを理解することも、重要な環境理解の学習場面である。海水の流れ、温度、海底の状況、岩の状態、そして魚がどのように餌を食べるのかを学生には実際に水中で観察させることを実施している。(図3)

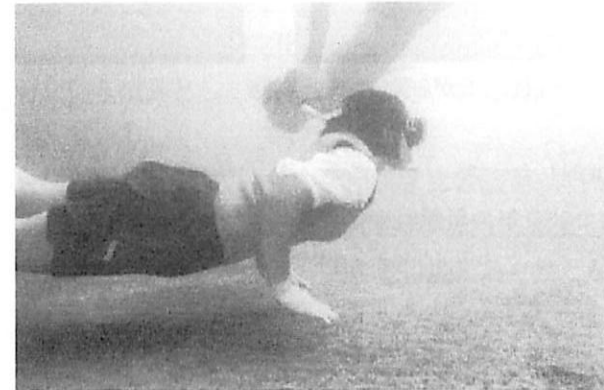


図3. 水中における魚の観察および環境観察

さらに、実際に釣り針に餌を付け、釣り糸を持って水中を見ながら魚を釣る体験を取り入れるようにしている。この方法により、どのように魚が餌を食べるのかを理解させ、釣るタイミングを感覚として確認することを心がけている。

水中眼鏡やシュノーケル、フィン、ライフジャケット等の着用や使い方も安全に海洋実習を楽しむ技術の習得として、積極的に取り入れている。図4は水中を観察しながら魚を釣り上げる方法である。

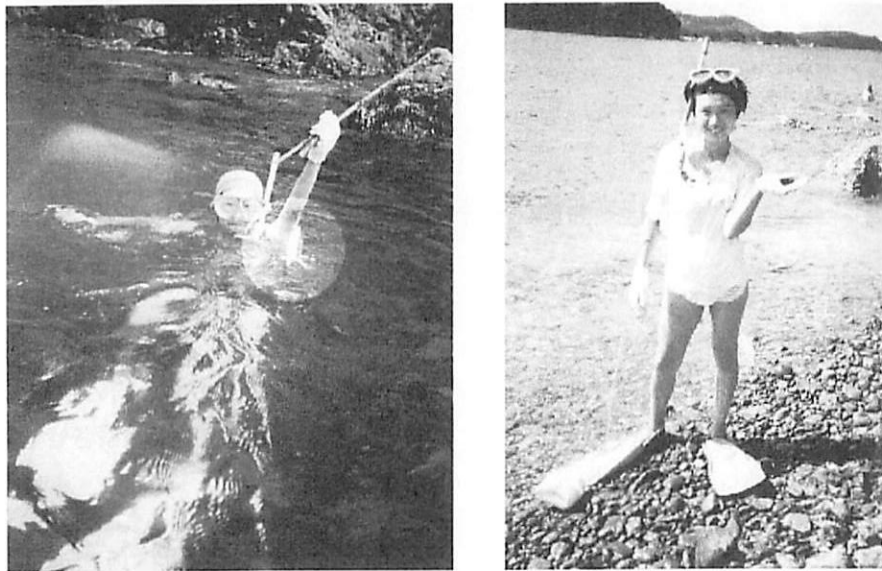


図4. 水中の魚を観察しながら釣る

(4) 魚を調理し食する

子どもおよび青年の魚離れが問題となっているが、調理に対する理解が構築されていないことも拍車をかけていると考えられる。実際には釣り上げた魚の一部を食することも重要な教育の課題である。

図5には、簡単な魚の扱い方を体験する様子を示した。もちろん、事前学習として毒のある魚や食べることに不向きな種類に関する知識を与える

取り組みが必要である。

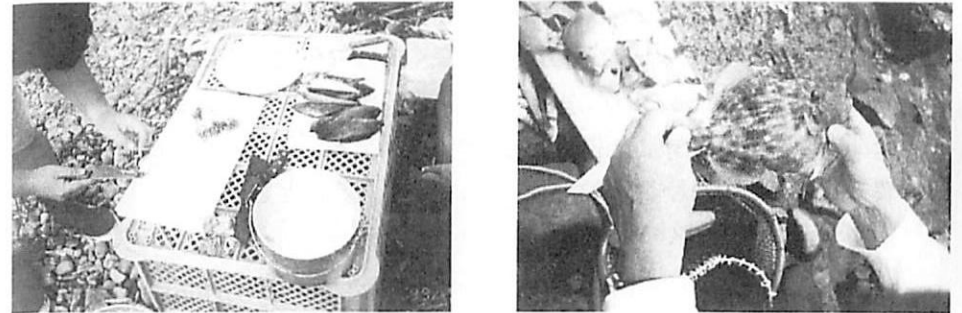


図5. 釣った魚の調理

Ⅶ. まとめ

野外教育文化として捉えることのできる「釣り」という生活文化を、大学における授業としてどのように取り組むことが出来るかを、実践例をもとにして考察してきた。「釣り」文化には、いろいろな解釈が存在し、様々な取り組みが考えられる。特に体育学を背景とした野外教育領域において、学校教育における授業として取り組む「釣り」に関しては、環境学や生態学、あるいは技術論や伝統文化など関わる要因が多く存在するため、その統一性を論議することを難しくしていることも事実である。しかし、環境問題を含めたこれからの食文化にどのように取り組むかは、野外教育における実習を伴う授業として期待されており、積極的に取り組むべき課題として理解している。

山本²⁾は、「釣り」を通して、豊かな自然環境を積極的に保持することの重要性を述べ、人間が現代社会において自然に対する観察力を低下させていることを指摘している。単なる「釣り」の技術論を教える授業であれば、大学の教養として取り組む必要は無いと考えられる。「釣り」を通して何を学ぶのかを伝えることが重要である。現代社会において、人間が自然に対する観察力を低下させている影響は、地球温暖化も含めて多くの環

境問題の原因となっている部分でもある。

盛川は¹³⁾は、「釣り」の仕掛けを自分で作る人が減少していることを指摘し、釣り針や釣り糸の結び方を知らなくても魚を釣ることのできる現状を危惧している。もちろん、釣具メーカーの技術革新に頼るところが必要な部分もあるが、一般的生活レベルでは道具を考える状況を楽しむ事が重要である事を指摘している。多くの人間が考えることを放棄する企業依存型ブラックボックスの存在の多さが、環境に与える影響は大きいのである。「釣り」だけに限らず、家庭菜園や家庭大工への志向の高まりは、構造や生産を他人任せにせず、自ら理解し考える取り組みの必要性を感じていることの出現であると考えている。

石川は¹⁴⁾は、アウトドアライフの一環として「釣り」に取り組む事をすすめている。特に、魚を観察する習慣を培い、海辺や河川を散策するだけで、自然を見る目が変わってくる事を示唆し、自然との対話や水中の魚とゲームをしている感覚で楽しむ事をすすめている。精神的な側面での自然との対話も重要な要素であるが、まず身体を稼働させて自然を理解する取り組みが必要である。「釣り」はその一翼を担う十分な条件を備えていると考えることができる。

大学における授業としての「釣り」は、単なる技術論に徹するのではなく、自然環境に目を向ける取り組みの一環として具体的に取り組む事が重要である。伊藤は¹⁵⁾は、著書『自然とつきあう』の中で、実りある環境教育を実現するために、湖水の汚染や海洋汚染に気が付くことの重要性を指摘しているが、水中に生息する魚や貝類などの水産資源を支える環境の変化をプランクトンレベルまで敏感に対応する教育の必要性を説いている。

内藤¹⁶⁾の指摘するように、日本は高度経済成長期に、農地と山林で生産と生活を何百年と継続してきた相互扶助を廃絶し、人工的な自由市場を原理として動く社会へと転換してきた経験を持っており、経済学がこの状況に気がつかなければ、世界が抱える大きな問題の解決につながらない事を示唆している。教育の問題点や人間生活に起因する諸問題の多くが、こ

の自然環境および社会環境を無視した効率だけの社会構築に依存する状況は、学生と共に考えていかなければならない問題でもある。

「釣り」文化を再考することは、海洋のみならず里山における環境を考えることにおいても重要である。斉藤¹⁷⁾は、里山における活動は子どもが自然を学ぶ機会を提供していたと指摘している。小川で魚を捕ることや観察をすることが、周囲の環境に目を向ける能力を培うことにつながることを示唆している。

大学の教養教育が積極的に取り組まなければならない部分は、まさしくこの部分であり、「釣り」を授業として取り上げることの必要性を表している部分でもある。特に、体育関係者が教育や身体文化を重視する「釣り」においては、自然環境における「釣り」文化の存在価値を中心に、自然の中における人間としての存在をいかに理解し、恵まれた自然環境の中での身体運動の在り方を考えることである。

参考文献

- 1) 井伏鱒二 (1998) 井伏鱒二全集第21巻, 筑摩書房
- 2) 井伏鱒二 (1997) 井伏鱒二全集第24巻, 筑摩書房
- 3) アイザック・ウォルトン (1974) 完訳釣魚大全, 角川選書
- 4) 徳富蘆花 (1980) 精選名著復刻全集近代文学館自然と人生, ほるぷ
- 5) 井伏鱒二 (1952) 川釣り, 岩波新書103, 岩波書店
- 6) 池田彌生 (1995) 釣りから学ぶ—自然と人間の関係—, 成山堂書店, 175-199.
- 7) 篠原稔 (1993) 日本独自のスポーツフィッシング=へら鮒釣りで教養を, 大学体育72号No.14
- 8) 宮下充正 (1997) 旅に出て、釣る, ブックハウス・エイチディ
- 9) 開高健 (1978) オーバ!, 集英社, 140-167
- 10) 市野義夫 (1992) 天才は歩く—産業医が診たビジネス社会—, 日本電気文

化センター, 134-137

- 11) レオ・レオニ (1969) スイミー——ちいさなかしこいさかなのはなし—, 好学社
- 12) 山本素石 (1982) 山釣り賛歌, アテネ書房
- 13) 盛川 宏 (1990) 釣魚三昧, 講談社
- 14) 石川皓章 (1996) はじめてのアウトドア・ライフ—フィッシング—, 人文社
- 15) 伊藤和明 (1987) 自然とつきあう—実りある環境教育のために—, 明治図書
- 16) 内藤 勝 (1999) 自然とエントロピーの経済学, 高文堂出版社
- 17) 斎藤宗勝 (2000) 君たちへの遺産白神山地, アリス館